寄せ場の臨床社会学
――「野宿者問題」の社会的構成と関わって――

西田　心平*

本稿では，寄せ場に照準した臨床社会学に固有の課題とは何か，そして，その際引き受けるものは何かについて追求する。そのために釜ヶ崎をフィールドとして，調査者としての筆者と被調査者との関わりの変容を臨床場面に即して具体的に検討している。社会問題とは，言うまでもなく社会的に構成されるものである。つまりそこに，客観的な実在性はない。こうした認識を踏まえて現在の寄せ場研究は，積極的に問題構成を図る立場と，権力者側による問題構成の脱構築を図る立場とに分けられる。では，果たして「野宿者問題」の当事者の声を，他者が代弁することは可能なのであろうか。本稿では，１つの試みとして「臨床場面」の記述を通じて語りうるものについて考察している。それはマージナル・マンに特有のリアリティや日常的な態度に関わる相互作用である。ただし，その記述は，調査者が「調査者する側－される側」の権力関係を自覚的に引き受ける作業を踏まえて，初めてその妥当性が判断されるのである。こうした考察によって，根源的なところから私たちの自明の日常を問いつつ，同時に臨床事例に関わっていくという寄せ場の臨床社会学に固有の課題が明らかにされる。

キーワード：寄せ場，臨床，構築主義，関与規則，よそ者（stranger），マージナル・マン，意図せざる結果

目　次

はじめに
１　「臨床」という課題
　１-１　構築主義と寄せ場研究
　１-２　寄せ場における「臨床」
２　寄せ場臨床のフィールドワーク
　２-１　臨床場面の記述
　２-２　調査対象へのアプローチ
　　―炊き出しにおける関与規則―
　２-３　「よそ者（stranger）」としての相互行為
　　―ストリートライフの技法―
　２-４　ライフヒストリー・インタビュー
　　―マージナリティの意味世界―
　２-５　援助行為の意図せざる結果
　　―居宅生活のアイロニー―
３　考察―「野宿者問題」の社会的構成と関わって―
　３-１　臨床事例が語るもの
　３-２　臨床場面の危うさ
　　―参与観察から関与観察へ―
　３-３　「ホームレス」とは誰か
　　―日常性をめぐる問い―
おわりに

＊立命館大学大学院社会学研究科博士後期課程

はじめに

臨床社会学はいったい何を引き受け，何を問うのか。これが本稿の根底を流れる問いである。筆者は，98年より大阪市西成区の一画に位置する通称「釜ヶ崎」をフィールドとして，この地域に関わって生きる日雇労働者や野宿者へのインタビュー調査を行ってきた。この調査の過程で筆者は，寄せ場というフィールドをひとつの臨床現場として捉えていくことの必要性を強く感じるようになる。これは，調査者としての筆者が，いわば被調査者としての日雇労働者や野宿者から一方的にデータを収集するだけでなく，被調査者に対してさらに積極的に関与することが必要とされる場面に遭遇してきたことが背景にある。その場面とは，被調査者にとって路上で生きること自体が困難な状態に至ることで，それによって何らかの援助的な関わりが必要とされる局面である。こうした局面においても，依然，調査する側とされる側の非対称的な権力関係において何ら変化が生じるわけではないとするなら，寄せ場に照準した臨床社会学[1)]は，そのフィールドで何を引き受け，そこから何を語り得るのだろうか。こうした問いに向けて，筆者自身が関わってきた事例をとりあげ，詳細に検討していくことを通して答えを探ることが本稿の課題である。

1　「臨床」という課題

1-1　構築主義と寄せ場研究

従来，寄せ場は「解体地域」であると称されてきた。あるいは，研究者によるこうした言説にもとづいて，社会防衛と結びついた観点から寄せ場へ向けた対策や施策が生み出されてもきた。ここで重要なのは，研究対象の認識をめぐって，専門家としての研究者の言説それ自体が，スティグマの付与（stigmatization）とそこでの認識の再生産に貢献してしまうということであり，その後の政策展開にも一定の影響を与えてきたということである。研究者が自らの価値判断に無自覚であった，こうした社会病理学的なアプローチへの反省を踏まえ，現在の社会学では，社会問題を客観的に存在するものとしてではなく，社会的に構成されるものとして把握していく立場をとる。寄せ場に引きつけて言えば，研究者の言説それ自体が「野宿者問題」における構成過程のポリティックスに何らかの形で関わることに自覚的になるということである。

現在の寄せ場研究は，こうした認識を前提として，自らの価値判断を明らかにした上で積極的に問題構成を図っていくという立場と，より引いた角度から問題構成によるせめぎ合いのポリティックスそれ自体を分析の対象として設定していくという立場の，２つに大きく分けることができる。前者は，野宿者を析出する構造的なメカニズムを明らかにし，野宿者を「怠け者」として捉える社会意識や野宿生活へ至る個人要因説に対して，構造的要因からの説明軸を用意する（青木2000; 西澤 1997）。後者は，とりわけ行政レベルでの「自立支援」や「対策」の制度化が，再び新たな排除を生み出しかねないという点に配慮し，問題構成の社会的なプロセスを辿ることで，野宿者について記述する権力主体の意図を暴き出す（中根 1996; 2001; 狩谷 2001）。繰り返すまでもなく，社会問題は客観的に存在するものではなく，社会的に構成されるものである。前者はその問題構成の一端を研究者自身が積極的に担い，後者は行政権力が担

う問題構成のあり方そのものに焦点をあてる。いずれも重要な社会学的課題にせまるアプローチであるが，では，野宿者自身を中心に据えた問題構成はいったい何処にあり，それは誰が担うのか。

島和博は，行政や市民の活動による問題構成のあり方について言及した文章で，「野宿者問題の本質を巡る議論を抜きにして，ただ解決のみが性急・拙速に追求されるなら，問題の解決ではなく，むしろその隠蔽に行きつくことになる」（島 2001: 179）と指摘した上で，以下のように述べている。

> 野宿者の存在が社会的に問題化される過程において無視されたものは何かといえば，それはほかならぬ野宿者自身であるという皮肉がある。…さしあたり問題を巡る直接的な利害関係から免れている私たち一般市民はもちろん，行政当局者や野宿者支援の運動・ボランティア団体をも含めて，私たち社会総体が多かれ少なかれ，野宿者の存在とその生活のリアリティをとらえそこね，さらにはそのことに無自覚なまま野宿者問題を構成しようとしてきたのではないか。
>
> 野宿者は野宿者問題そのものの中において無視されるか，よくてもせいぜい施策や救済や支援の対象にとどまっているように思われる。その意味では，この間の一連の問題化の過程そのものが問題の当事者であるはずの野宿者を無視して成り立っているのである。（同上: 181）

この指摘は，研究者による問題構成のあり方にも当てはまるだろう。野宿者を中心に据えた問題構成は，いまだ空白のままなのである[2)]。しかし，そのことをもって現在の寄せ場研究を，野宿者へ向けたまなざしの欠落であるとして批判することはできない。なぜなら，野宿者という言葉がすでに，社会的に構成された一カテゴリーに過ぎないのだから。このカテゴリーに関する何らかの記述を行う時点で，記述主体に内在する地位や意図と切り離しては，それが意味するものが何かについて，もはや理解することはできないのである。したがって「野宿者を中心に据えた問題構成」という筆者自身の問いかけがすでに，既存のイデオロギーから発せられたものに過ぎないということになる。その意味で構築主義以降の社会問題研究においては，島の言う「野宿者問題の本質」なるものを語ること自体が実に困難な状況に，私たちは立ち会っていると言わねばならない。

では，「野宿者問題」など何処にも存在しないのか。社会的な意図や脈絡から切り離された地点では，正にそうであると言わねばならない。しかし，「野宿者」が空疎なカテゴリーに過ぎないとしても，路上で生きる人々にとって，それ自体の現実や苦しみは残る。それは誰が語るのか。果たして他者がそれを語ることができるのか[3)]。本稿では，この困難な問いに向き合うことを，まずは議論の出発点にしたいと思うのである。

1-2　寄せ場における「臨床」

横浜にある寄せ場・寿町において，かつて日雇労働者への生活相談の仕事をしていた野本三吉は，「臨床」を「直接的な体験のことであり，直接触れ合った関係の中で感じとったもの」（野本 1995: 55）という意味で捉えている。野本は，寿町で「生活相談員」としての職業的な立場から日雇労働者との関わりを始めるが，しだいに日常生活もこの地域で展開するようになり，それによって「仕事を通しての限定した関わりから，同じ町の住民としての関わり」（1995: 57）を重ねていくようになる。そして，そこでの交流や対立，協同を含めた自らの体験

を基盤として，「それまで聞かされてきた寿町のイメージと，（中略）直接的に触れ合って見えてきた寿町とは，さまざまな点で異なって」（1995: 55-56）いることを発見し，さらには現場の職員として「行政と住民（日雇労働者－筆者補足）との対立構造の間にはさまりながら，住民の側に寄りそい，そこから具体的な解決策，社会施策をつくり出してゆくという役割」（1995: 62）を見出すまでに至る。その際，日雇労働者自身が起こした行動や闘いと共鳴し合い，共に展望を探り出してきた自らの実践を「臨床体験の交流」と呼んでいる。

ここで重要なのは，寄せ場における臨床がまず①間接的な情報からではなく，生活世界への参入によって直接的に感じとられたものであるということであり，さらに②それが他者との具体的な相互作用の過程で，そこでの自分自身の認識や関わり方の変化として表れてくるということ，そして最後に③この実践的な関わりとして，他者の行動と協同しオルタナティブな解決策を展望してきたということである。

これらは，筆者の調査実践に置き換えるならば，①フィールドワークによる実践的知識[4]の獲得ということであり，これが深まることによって②傍観者的な参与者から積極的な関与者へ変化していくということである。そして③はどうか。野本の寄せ場生活は71年からの約10年間であるが，筆者の調査は98年より現在に至る。その年代を踏まえた状況的な違いは，日雇労働市場としての寄せ場機能の弱化と日雇労働者の高齢化である。筆者が出会ったかつて日雇労働者であったという人物は，調査を開始した当時は野宿生活に至っており，寄せ場から出て都市の路上で生活しているという状況であった。調査の過程で被調査者にとって生きること自体が困難な状態に至ることで，調査者としての筆者の側に援助的な関わりが生じたという点において野本の実践とは異なっている。したがって，③はオルタナティブな解決策の展望ではなく，まずは援助的な関わりということになるだろう。つまり，筆者にとって寄せ場の臨床とは，フィールドワークによる実践的知識，参与者から関与者への変化，そして援助的な実践という３点の相互連環として把握されることになる。

では，路上で生きる人にとっての現実や苦しみを他者（この場合は調査者）は語ることができるのかという問いに戻ろう。本稿は，この困難な問いに二者択一の答えを出すことが目的ではない。ただ，一つの試みとしてこの「臨床」を介して語り得るものについて検討したいのである。以下では，「釜ヶ崎」における筆者のフィールドワークをとりあげ，調査者としての筆者と被調査者との関わりを臨床場面に即して具体的に見ていこう。その上で，「野宿者問題の構成」と関わりつつ臨床社会学は何を問うことができるのか，そしてその際フィールドにおいて何を引き受けざるを得ないのかについて考察していくことにする。

2　寄せ場臨床のフィールドワーク[5]

2-1　臨床場面の記述

本章では，フィールドで出会ってきた被調査者のうち主に一人をとりあげて，そこでの事例を臨床場面に即して検討していきたいと考えるが，その前にもう一度，野本の議論に立ち返っておきたい。野本は，「相談を受ける人」という職業上の限定した関わりから出発し，そこからさらに寄せ場の一住人として生活全般にわた

る親密な関わりを展開していったことについてはすでに述べた。ただし，ここで大切なのは，日常生活においていかに日雇労働者との交流が親密で豊かなものになろうと，職業的に規定された既存の社会関係に何ら変化が生じるわけではないということが経験的に明らかにされている点である[6)]。野本の場合，このことが充分に自覚されて，初めて既存の社会関係と個別具体的な人間関係の隙間を埋めようと，「臨床体験」を基盤とした行動や実践が生み出されていくのであった。

社会調査に置き換えれば，それは調査する側とされる側の非対称性という問題につきあたる。そこで規定される権力関係は，どれほど被調査者との個別の関係性が深化していこうと，何ら変わらないということについては強調しておかなければならない。そして，野本の実践と同様に筆者のフィールドワークにおいても言えるのは，その点を充分に自覚した上で，初めてフィールドでの個別的な関係性と調査上の社会関係の隙間を埋めようと，自ら「傍観者的な参与者から積極的な関与者へ」と関与のあり方をシフトさせてきたということである。したがって臨床場面を記述するとは，ある種調査上の枠組を超えた出来事や被調査者から突きつけられたリアリティに調査者自身が巻き込まれることで，自らの態度変更を余儀なくされてきた様相を積極的に語る作業になる。なぜなら臨床社会学とは，それら自体を社会学的データとして積極的に受け入れ，そこから再び自らの方法論を鍛えつつ理論化をめざす作業に他ならないからである[7)]。

そして繰り返すまでもなく，そこでの方法論的前提は，被調査者との関係性をめぐる倫理的負担や権力性の問題を，調査者の側が自覚的に引き受けるということである。それを担保するための具体的な作業としては，フィールドにおける調査者と被調査者との関係性を出会いの偶然性や親密さの度合で語るのではなく，あくまで調査者を主体とした戦略的なアプローチとして記述し，そこで作用している調査者の意図を読み手に向けて常に明らかにしておくことであろう。以上のことを踏まえた上で，まず，調査者としての筆者が本章でとり上げる被調査者に対してどのような方法でアプローチしたのか，その一端を明らかにしていくことから記述を始めていこう。

2-2　調査対象へのアプローチ
―炊き出しにおける関与規則―

筆者にとって「釜ヶ崎」という地域は，自らの生活世界とは異なるある種の外集団（out-group）として存在し続けるわけであるが，視点を転換すれば，釜ヶ崎で生活する日雇労働者から見たとき，地域の中に現れた筆者の存在は常によそ者（stranger）として映ったことだろう。このことを感じたのが，日雇労働者への炊き出しの手伝いを通してフィールドワークを開始した98年2月の段階であった。地域内の「三角公園」という場所で毎週２回（水・土，98年現在）行われていたもので，朝の９時前から調理を始め，昼の12時前後には行列をなして待っている日雇労働者に向けて配食し，最終的な片付けまでを行うのであるが，その作業を一貫してボランティアとして集まってくる日雇労働者自身が中心となって賄うのである[8)]。調理の準備をしている最中に，汁に入れる野菜などを切り分けながら，日雇労働者どうしが様々に作業の指示を出し合い，冗談を言い合い，噂話をし合い，笑い合い，時に喧嘩になり，途中で

顔を出さなくなる者もあった。

そうした状況の中，筆者には，もちろんその間に交わされている話の一つ一つの内容は理解できるが，それらが会話形式として成り立つ際の背後に潜んでいるコミュニケーション・コードが理解できず，その違いにどうしても戸惑ってしまうのである。であるから，筆者も同じように調理を手伝いながら，それらの会話や行為のやりとりに耳を傾けて，一緒に笑ってみたり，顔をしかめてみたりして反応を返すことはできるが，話の内容に対してこちらから積極的に話題を返したり，質問してやりとりの幅を広げるなどということはほとんど不可能であった。一つは，そもそもどのような話題や返答が適切なのか分からないということ。もう一つは，たとえこちらから会話に加わったとしても，実際問題として多くの場合相手からの沈黙を招いたり，見当違いの答えが返ってくるだけであった。

しかし，一方で日雇労働者から見れば，筆者はどのような存在であっただろうか。日雇労働者や野宿者と呼ばれる人々は，市民社会において常にスティグマを課せられて生きて行かざるを得ない存在である。そうした周辺的な状況に置かれた人々にとって，釜ヶ崎は唯一，「少なくとも自分も他の誰とでも同じなのだという態度を大っぴらにとれる場所でもある」（Goffman 1963b=1993: 237）。その意味では，いかにそこでのコミュニケーションに加わろうと試みたところで，「常人」（nomal）である筆者が，彼らにとって常によそ者（stranger）として映ることはもはや避けられないだろう[9]。

では，炊き出しの手伝いに集まっている日雇労働者のやりとりは，どのような関与規則に基づいているのか。彼らは相互に名前も語らないまま，過去の経歴も必要以上には明かさない。現在どこに寝ているのか，仕事に就けている頻度はどれくらいか，今日この炊き出しが終われば何処へ行く予定なのか，そのような個人的な関心事についての情報交換は，この場では全くと言っていいほど行われない。むしろそれ以外の，路上強盗に襲われた経験や現在切っている野菜の種類や品質，最近話題のニュースの情報といった，相互にあたり障りのない，いわば「副次的関与」としてなされる会話が，その場のコミュニケーションの大半を構成しているのである。つまり，そもそもなぜこの街に来たのか，なぜわざわざ炊き出しの手伝いに関わるのかといった，自らの動機という「主要関与」を構成する語彙については，ここでは注意深く避けられるのであった。こうして，いったん言及するやいなや，無骨に自らの過去や経歴に突きあたらざるを得ない情報を，お互いが慎重に回避し合うことによって，そこでのやりとりは極めて焦点の定まらない相互作用（unfocused interaction）となる。そして，そこでの関与規則に基づいて，「今・ここにいるあなたは誰なのか」という問いをお互いが留保したままで，炊き出しという一つの社会的場面はようやく維持され続けているのであった[10]。

ところが，このことは，調査者である筆者にとって実に厄介な問題を突きつけることになる。つまり，筆者が，そこでのパフォーマンスによって支えられているリアリティを維持しようとすればするほど，それだけ一層自らの調査目的から遠のいてしまうという事態が生じる。言い換えれば，パフォーマーとしてそこでの関与規則に忠実に振る舞いながら炊き出しに関わるということは，すなわち特定の他者に向けて深くアクセスしないということであり，筆者はそこで「インタビューをさせてもらいたい」と

いう意図すら表明することができないということである。かといって，自ら関与コードを犯してインタビューを試みようとすれば，即座に相手からの信頼を失いかねず，したがって調査そのものを破綻させることにも繋がる。

ゴフマンはかつて，行為主体は他者の前で「行動をとおして彼の与える印象を信頼できる正確なものと感じさせる努力を重ねる」（Goffman 1959=1993: 9）と述べたが，筆者は以上のようなジレンマを回避するために，まず見かけ上の態度を通して「その場にいても問題のない人間」として映るような振る舞いに努めることにする。つまり，しばらくは本来の調査目的を態度として表面に出すことはせず，毎回必ず炊き出しの手伝いに参加することによって，まずは「熱心なボランティア」としての印象を周囲に与え続ける戦略をとる。この間，インタビューを行わないことはもちろん，むやみに関与規則に触れることがないよう余計なコミュニケーションにも加わらないのである。

そこでは，とにかく日々のボランティア作業に従事することで，いわば「ただただ相手から得たいと腐心している特定の反応を喚起する可能性の高い印象を与えるためにのみ，ある特定の仕方で自己自身を表出する」（Goffman 1959=1993: 7）行動をとっていく。そしてこの場合，筆者が「相手から得たいと腐心している特定の反応」とは，奇しくも日雇労働者の方から関心をもって筆者に向けてアクセスしてくるということに他ならず，もはやそのタイミングに賭けるしかないと，その時点で筆者には思われたのである。

2-3　「よそ者（stranger）」としての相互行為―ストリートライフの技法―

こうした意図にもとづいて炊き出しのボランティアを６ヶ月間にわたって継続する過程で，事実上，筆者に向けてアクセスしてきた日雇労働者は一人ではなかった。しかし，そこでの相互作用から本来の調査目的であるインタビューへ移行していくには，それだけでは充分な関係上の根拠とはなりえないことも明らかになっていく。筆者はこの時点で，多く見積もったとしても「その場にいても問題がないであろう存在」として受け入れられたに過ぎないのであり，相手に対して「インタビューをさせてもらいたい」という態度の表明は，筆者が伝えようとしてきた自らの印象に対する「破壊的情報」ともなりかねないことは常に予想された。

例えば，２ヶ月目の同年４月に筆者に声をかけてきた一人の男性は，筆者に対するそこでの接し方において，基本的に炊き出しにおける関与規則に準ずるものであった。すなわち，交わされるやりとりは，その日の天候に関する話題であり，野菜の切り方に関する年配者が若者をたしなめる時のような指摘であり，あるいは釜ヶ崎内で行われる夏祭りなどの年中行事に関するエピソードであったりした。２ヶ月前と違うのは，進んでその男性の方から筆者に話題を持ちかけてくることであったが，では彼から直接筆者自身のことについて聞かれたことはというと，「何処から来たのか」ということだけであった。

こうして彼と筆者とのやりとりは，互いに名前も語り合わないまま，依然，焦点の定まらない相互作用を繰り返していくことになるが，日雇労働者どうしのやりとりと違っているのは，筆者が関与規則を暗黙のうちに共有する内集団

のメンバーではなく，あくまで外部からやって来るよそ者（stranger）であるということであった。ジンメルは，その「異郷人についての補説」の中で「しばしば彼には驚くべき率直さと告白が，いっさいの近い関係者には慎重に保留される懺悔の性格へ達するまでに示される」（Simmel 1908=1999: 287）と述べ，いわゆるよそ者（異郷人）と集団内のメンバーとの特有の相互作用形式において，それ故にこそ開示されるコミュニケーションがあることを示唆している[11]。

例えば，その男性が声をかけてきた半月後の4月下旬，炊き出しが終わった際に「帰る場所に一緒に行ってもいいか」と尋ねた筆者に対して，彼は二つ返事でその場所へ案内する。自分の寝場所を筆者に教えたことに関して，後日，彼は以下のように語っている。

筆者：釜ヶ崎の住み難さというのはありますか？
男性：いやー，もうね，面倒っていうかね。雑音が多すぎるでしょ。そういう飲んだくれとか仲間とかね。こっちが疲れてるのに寄って来たりとか，相手の気持ちも汲まんとね。それだったら，もう全然，こういう知らん所の方がね。だから，ここでおれが寝てんの知ってんのは，あんたともう一人くらいしかおらんよ。西成（＝釜ヶ崎）でも言うよ，みんなが，（おれに，）「何処で寝てんのかい？」って。（その時は）難波元町だって言うよ。それしか言わんよ。長い付き合いの奴にも（それ以上の場所は）言ってないよ。（1998．6．22）[12]

案内されたのは釜ヶ崎地域から30分ほど南へ歩いた難波元町の一画であったが，彼がこの場所で野宿生活していることを，筆者はその日，初めて知ることになる。彼にとって，筆者がどのような存在として定義されているのかは定かではない。だが，この寝場所は筆者ともう一人の人間にしか教えていないという意味では，釜ヶ崎での「長い付き合いの仲間」とは区別されて捉えられていることは確かなようである。彼は，「長い付き合いの仲間」が「全然，知らん所」を生活の拠点とし，そうした仲間にはこの場所を伏せたまま，筆者ともう一人の人間に対してだけは教えているのである。ちなみにもう一人の人間とは，この近くで同じように野宿生活をしている彼の知り合いの男性であるが，釜ヶ崎とは全くと言っていいほど関わりを持っていない人物である。その意味では，筆者と同様，内集団の関与規則を共有しない，よそ者により近い存在であると言える。

以後，筆者は炊き出しの場ではなく，そこから離れたこの場所において彼と対面的（face-to-face）なやりとりを行うことになる。「このような相互行為をおたがいに許し合うことは，どの社会的地位の人々の間にも見られる幅広い現象のひとつである」（Goffman 1963a=1996: 99）が，ここで特徴的なのは，釜ヶ崎における「われわれ」意識のエトスから一時的にも解放された，いわば役割から離れた状態にある彼と全くのよそ者である筆者が，相互にやりとりを交わしているという点にある[13]。そして，その中で彼は文字通りの率直さで，釜ヶ崎での「長い付き合いの仲間」には綿密に伏せている自らのストリートライフの具体的状況とそこでの技法を，筆者に対して少しずつ語り始めるのである。

日雇労働者や野宿者と呼ばれる人々にとって，釜ヶ崎という地域は自己防衛のための避難所となりうることについては述べたが，その意味で言えば，都市の路上のただ中に留まることは，

自らの身体や振る舞いをそれこそ丸ごと「まなざしの地獄」に晒してしまうことでもある。

男性：人に迷惑かけるわけでは無いんだからね。それを世間はね，何か変な眼で見やがってね。この辺（の住民）は，みんな，おれに物も言わへん。（1998．5．1）

こうした「世間」の，あるいは社会の抑圧的まなざしを皮膚でひしひしと感じながら，では彼はどのようにして自分を維持して生きるのであろうか。続けて彼はこのように述べている。

男性：いや，でもね，それでいいんだよ。却ってね，警戒された方がね。生半可甘く見られたら…。おれ，こんな所でも堂々と寝てる。ここなんか，前から，おれずっと寝てたんだから。（…）ここはもう木津信だから。つぶれたんよ，もうね。今，ここにもう一人，おれが知ってる奴が寝てるよ。おれは今，そっちだけどね。まあ，いいよ綺麗だし。社員がなんぼ出入りしてたってね，なんも言わんしね。逆に（その社員が）タバコなんか置いていくよ。
（…）あのー，きちっとしてたらね，見てる人は見てんだよ。そりゃあ，最初は煙たがるよ。「このおっさん，こんな所に寝やがって」なんてね。言ってるの間違いないんだから，上役に。（でも）上役（＝上司）がね，「ほっとけ，あのおっさん，何にも悪いことしてないだろう」なんて言ったら，下（＝部下）は何もできないんだから。それがサラリーマンなんだから。誰一人文句言わん。だっておれ，きちっとしてるからね。邪魔してないでしょ，誰にも。（1998．5．1）

彼が寝ている場所は，倒産した会社の出入口にあたる部分であった。だからといって，もちろん会社の上司に許可を得ているわけではない。「きちっとしてたらね，見てる人は見てんだよ」というのは，毎朝，彼がこの場所から出かける際に必ず玄関口を掃除して行くことを指している。もちろんこのことが功を奏しているのかも定かではない。だが，ここで重要なのは，彼が一方で「世間」のまなざしが押しつけてくる「警戒される」存在としての役割を演じながら，他方でそのイメージを利用しつつ堂々と自らの目的に適った行動をとっている姿勢を積極的に語っていることにある。その意味では，毎朝の掃除もそこでの生活において「きちっとしている」ことも，むしろ「誰一人文句言わせない」ための口実づくりに過ぎないのだとも言える。P・L・バーガーの指摘するとおり「彼らは自分たちに与えられた役割を演じつつ，その裏では，真向から対立する考えを抱いている」のであり，そして何よりも「この種の二枚舌的二重性こそ，そうした（マージナルな）状況におかれた人々の自意識の中で人間的尊厳を維持しうる唯一の方法である」（Berger 1963=2000: 198. カッコ内は筆者）ということが，ここでも言えるのである[14]。

2-4　ライフヒストリー・インタビュー
―マージナリティの意味世界―

筆者は，この時点に至ってようやく自らの名前を名のり，同時に彼自身からも名前を告げられることになる。彼はそこで自らをオオノ・イサオ（仮名・以下，オオノ）と名のり，59歳であると言う。彼にしてみれば，個人的な情報を開示したことについて，よそ者である筆者に対しては釜ヶ崎での関与規則を意識することがそれほど必要でなくなり，また，対面的なやりとりにおいて周囲に気を使わなくても済むという点が大きかったように思われる。そして，筆者にとってこのことは，これまでの相互コミュ

ニケーションの大半を占めていた「副次的関与」としてなされた会話を，彼らの意味世界を表象する「主要関与」へと一気に焦点を定めていきたいという意図が含まれていた。この場合の「主要関与」とは，「なぜ，この場所で生活しているのか」という一点に関わるテーマを措いて他にはない。筆者はこのことに関わって問いを発し，それに対してオオノは過去と現在を往復しながら自らの生活史を振り返るのである。

彼が語る生活史の足跡は以下のようなものであった。彼の両親は自分が６歳のころに亡くなっている。出生地はもともと山口県であるが，生まれてすぐに父親の仕事の関係で東京に移り，そこで昭和20年に大空襲に見まわれ一度に両親を失うのである。残されたオオノは，孤児院の職員に引き取られ，中学校を卒業するまでのあいだ福島県の孤児院にて戦災孤児として生活を送ることになる。そこの孤児院には，およそ120人もの自分と同じような子どもたちが暮らしており，小・中学校に通っている間はその子どもたちと共に数少ない教科書を共有し，鉛筆や消しゴムをまた貸ししながら使っていたという。中学校を卒業後，同時に孤児院を退院し，集団就職を通じて東京の隅田川沿いにある皮革製品を扱う工場での丁稚奉公が決まる。福島県の孤児院からはオオノを含めて８人がそこへ就職したが，彼は１ヶ月ほど働いた後，一人そこを逃げ出してしまったという。それからは洗濯屋の住み込みやパン屋の丁稚奉公，新聞の拡張員など様々な仕事を経て最終的に釜ヶ崎を中心とした寄せ場の日雇労働者の仕事にたどりつく。

その間に渡り歩いた地方も全国に及ぶ。日雇労働の仕事に就くまでは，新聞の拡張員を約15年間と一番長くやってきた。特に広島，岡山，島根，鳥取そして四国４県を転々としながら顧客の家を一戸一戸廻って契約を取る。しかし，時代が移り変わり各地域での新聞の需要も飽和状態に達してくると，販売所の責任者から期待されるだけの実績を上げることが難しくなるだけでなく，拡張員の仕事それ自体がもつ意味もしだいに薄れてくる時期がやってきた。しだいにオオノは，そこでの仕事にも限界を感じるようになり，時代の変化を見切って拡張員もやめてしまう。1970年代の初め，32歳頃のことであると記憶している。大阪の西成区に日雇労働者が多く暮らす簡易宿泊所街があることは，拡張員であったころからよく知っていた。当時，こうした寄せ場を通じて若い肉体労働者に対する需要は引く手あまたであったことから，オオノは拡張員を辞め失業状態になったと同時に大阪の釜ヶ崎へ向かうことを決めるのである。

戦災によって親族を失い，それによって家郷にもその根を失ったオオノは，こうして職を求めて絶えず社会移動を繰り返してきたのだという。言うまでもなく，「記憶それ自体は反復された解釈という行為である。われわれが過去を想い出す時，何が重要で何が重要でないかという現在の考えによって，過去を構築する」（Berger 1963=2000: 84）ことになる。彼は，以上のように自分の経歴を語った後に次のように述べている。

オオノ：（拡張員を辞めた後）それでもう，土方（＝日雇の土木作業員）はじめた。<u>まして技術もないし，こんな転々とした生活やってて何の技術もないんだからね。</u>だからもう土方が一番てっとり早い。<u>ほんで保証人も何もいらんしね。おいら保証人も何もないんだから。</u>（1998．５．7）

彼が洗濯屋の住み込みやパン屋の丁稚奉公を勤めてきた理由の一つに，「技術を覚えて暖簾分けをする」という目的があった。このように自営業主として身を立てることを何度か試みてはみたが挫折してきたのだ，ということを以前に語っている。ここで「何の技術もないんだからね」というのは，それを身につけようとしてもなお，無駄であったことを指しているのだと思われる[15]。そしてその根源では「保証人も何もない」ことが，社会において生きる上で自らの状況にマイナスに作用してきた。こうして彼は「履歴書のいらない職業」を転々としてきた過去の記憶に解釈の光をあてることで，自らのマージナリティ（境界性）に再び根拠を与えるのである[16]。

現在のような野宿生活の状況に至る背景を，彼はこうした視点から整序し，解釈し，意味を与えていくわけであるが，しかし「この意味に対する信頼が持続してゆくためには，他の人の絶えざる援助を必要とする」（Berger 1963=2000: 95）。つまり，それが自分にとって有意味な解釈であろうと，そのリアリティを維持するには相互に認め合い支え合うための他者の存在が必要である。自分には「保証人も何もない」ことは，不可避の問題として現状が「孤独」であることを示しているが，だが，その「孤独というリアリティ」を他の誰かと共有することは可能である。オオノの知り合いであり，彼の近くで同じように野宿生活をしているヤマダ（仮名・70歳）は次のように述べている。

ヤマダ：オオノくんも同じだと思うわ。天涯孤独でしゃあない。いつか２人で話したもん。あかん（死ぬような）時は，もう，無縁仏へ行くんや言うて，２人で話したことあったよ。今でこそ笑い事で言うてるけど，実際そんなようなこと話したことある。まあ，それもしゃあないね，なんて。（オオノくんは）ああいう気性やからな。そんなん言ってたわ。でもそれしかないもん，実際。（1998．8．12）

野宿生活の経験はヤマダの方が６年ほど長いという。双方は，98年の時点で約４年間にわたってストリートライフにおいて関わりを継続し，やりとりを交わしてきた。その中で２人が共有するタームは「天涯孤独」である。インタビューにおいてもこの言葉は何度も繰り返されるのであるが，しかし，そこには共に極めて醒めた態度が見られる点が重要である[17]。バーガーは，社会的存在の二面性についての議論で，ハイデガーの「ひと」の概念をめぐる存在の本来性と非本来性について言及している。「このことは，死とどう向きあうかという点で，とりわけ重要である。死ぬのはいつも一人ぼっちの孤独な個人だというのが真相なのだ。ところが社会は，死の恐怖をやわらげると思われる一般的カテゴリーの下に各人の死を包摂することによって，遺族や死ぬ運命にある当の本人たちを慰める」（Berger 1963=2000: 214）。その意味で社会が死という「剥き出しの恐怖からの防壁」であるとするなら，彼らの死への向き合い方は，社会の中で周辺的な位置しか与えられてこなかったが故に獲得した，社会的存在に本来的なパースペクティブであると言えるのかもしれない。

2-5　援助行為の意図せざる結果
―居宅生活のアイロニー―

オオノは野宿生活においても，季節に応じて移動を繰り返していた。難波元町の場所で行ってきたオオノに対するインタビューは99年３月まで継続することができたが，その後，彼は

筆者が知らない間に寝場所を移動しており，それからは彼に対するインタビューは頓挫した状態となっていた。釜ヶ崎での炊き出しの場においても彼の姿は無かったが，そのことに関して触れる他の日雇労働者の言葉もほとんど聞かれなかったように思われる。ヤマダにおいても，彼の生活のスタイルについてはよく分かっていたらしく，数ヶ月や半年もすれば，同じ場所に再び帰ってくるであろうと考えているようであった。ところが実際には，彼は炊き出しの手伝いの場にも，そしてヤマダの所にも，それから２年半弱にわたって一向に姿を現さないことになる。

筆者はその間，炊き出しの場でアクセスした他の日雇労働者へのインタビューを一方で継続していたが，他方では，居なくなってしまったオオノのことについてもやはり焦点をあてることが必要だと考えるようになる。それは，第１に，長い期間にわたる知り合いであるヤマダが，居なくなった彼のことをどのように取り扱うのか，第２に，ヤマダは野宿する場所を移動することなく同じ場所で生活を続けているのであるが，その意味で，おそらくオオノはいつかこの場所へ帰ってくるか，少なくともヤマダの前に顔を出すことがあるであろう。その際には，本人がどのように移動しながら，どのような生活を送っているのか，などについて詳細なデータを得ることができるのではないかと考えたからである。

まず，オオノという「不在者の取り扱い」についてであるが，先ほども述べたように彼がほとんど毎回のように参加していた炊き出しボランティアの場では，彼の不在ついて言及する日雇労働者は全くと言っていいほどいなかった。筆者の方から日雇労働者に向けて彼が何処にいるのか知らないかと何度か問いかけてもみたが，そもそも相手は彼の名前が「オオノ」であることを知らないため，筆者が言及している「不在者」と「オオノ」という人物を一致させた上で会話を進めることがほとんど不可能であった。では，ヤマダはどうであろうか。彼の方は，オオノが今回のように突然寝場所を変えてしまうことについては４年間の付き合いのうちで何度か経験してきたという。３ヶ月近く顔を会わせないこともあったが，その後，元気に再び戻ってきたことを考えれば，ほとんど心配はしていないということであった[18]。

筆者は同時に，第２の意図に沿ってオオノの行動を知るために，その後もヤマダへのインタビューを継続し，オオノが帰ってきていないか確認する作業を続けていた。そして2001年6月末日になって，ようやくオオノがヤマダの所に帰って来ているところに，筆者は出くわすことになる。その時のオオノの外見は，99年までのインタビューの過程で筆者が見てきたものと大きく違っていた。以前の服装は地下足袋姿に作業服が多かったが，その時は，薄いジャージ姿にスリッパであった。しかも以前は廃品回収で捨てられたばかりの服を常に取り替えながら身に付けていたのでまだ清潔さが感じられたが，そのジャージは随分長い時間にわたって着たままらしく，かなり汚れた状態であった。さらに，かつて所持していた生活道具（台車や調理器具など）は全く持っておらず，体一つで手ぶらのままであった。そして最も目を引いたのは，何ヶ月間もひげを剃ることができない状態であったのか，口ひげは伸び放題で，体もいくぶん痩せており，まるで病人のようであったことである。

オオノによると，彼は移動した先で人と喧嘩

になり，その際に頭を挫傷し一時的に入院していたのだという。退院後，再び野宿生活に戻るが，左の手足に痺れが残りこれまでと同じように生活することが困難になったのである。筆者はここに至って，オオノに対して何らかの援助的な関わりが必要とされるのではないかと考えた。もちろん「本人がどのように移動しながら，どのような生活を送ってきたのか」についての聞き取りは必要であったが，この場合はまず，路上から居宅への移行に筆者自身が付き添うことによって，居宅生活への変化が彼にとってどのような意味で作用するのか，それについて詳細に観察することが可能になると考えた。

筆者は釜ヶ崎の地域内にある，簡易宿泊所から転業したサポーティブ・ハウス[19]を利用し，オオノにそこの一室へ居宅として移行してもらうための手続きをとることにした。その際筆者は，病院での診断や生活保護の申請手続きなどのため，彼に付き添うことになる。５日間ほどかけて何とか無事に一連の手続きを終えた後，彼は７月６日よりそこのサポーティブ・ハウスで居宅生活を始めることになった。オオノは一連の手続きを経る間，ほとんど何もしゃべることが出来ないほどに精神的にも肉体的にも衰弱していたが，居宅生活を継続する過程で少しずつ表情も落ち着き，言葉を取り戻して行く様子も窺えた。付き添いをした筆者にとっても，調査上の関係から援助的な関わりへ，つまり被調査者の現状に積極的に関与していくことについての少なからぬ葛藤があったが，こうした結果を見る限りではやはり必要な関わりであったのではないか，と考えるようになる。

しかし，オオノの居宅生活によって生じた結果はそれだけではなかった。確かにオオノ自身，6月までの野宿生活を振り返ったとき，「あん時は，もう，どうしようもなかったわ」と語っている。筆者が彼に一貫して付き添うことを決め，「路上での生活をもう少し続けることが可能か，それとも居宅での生活を考えるか」と聞いたとき，彼は後者を選択した。

しかし，だからといって現在の居宅生活があらゆる意味で彼にとってプラスに作用しているかというと，そうではなかった。このことは，「ヤマダさんのところに帰ろうかなと思う」という彼の言葉に端的に表明されることになる。その他には，野宿場所を確保するために商店街の周りを掃除していたときの経験や，他の野宿仲間たちが作るいわゆるダンボールハウスの知恵や工夫などをしきりに語るようになる。彼にとって居宅生活で直接的に感じられるしんどさとは何であったか。それは周囲との人間関係であるという。もちろん，この人間関係においてこそ，左の手足に残った障害によって不自由になった生活を少しでも支えてもらうことが可能になる。だが，これまで移動生活を繰り返してきたオオノにとって，このことは「束縛」でもあり，「とにかく（周囲に）合わせて我慢するしかない」という問題でもあった。ストリートライフにおいては，「天涯孤独」という苦しみを仲間と共有することで，生きるためのパースペクティブを見出すことができた。だが，居宅生活は彼にとって「束縛」というこれまでとは性質の異なる新たな苦しみを生み出すことにもなったのである。

３　考　　察
――「野宿者問題」の社会的構成と関わって――

３-１　臨床事例が語るもの

１つ２つの事例を踏まえて一般的な議論へ持

ち込むことの拙速さは，当然慎まねばならない。この点を充分に認識した上で，少なくとも本稿で取り上げてきた臨床場面の事例がわれわれに教えてくれることは何か，それについて若干まとめておこう。

筆者のフィールドワークは釜ヶ崎での炊き出しボランティアから始まった。そこで必要とされたのは，ボランティアとして集まってくる日雇労働者でさえ自らの過去や経歴に関わる情報は決して周囲の仲間にも明かさないという関与規則の認識であった。これはいわばフィールドの中で身についた実践的知識であるが，同時にこのことは調査目的からその世界に参与しようとする筆者自身を否応なく「よそ者」として感じさせる経験でもあった。そこで筆者は，ひとまず関与規則に従いながら「その場にいても問題がない人間」として受け入れられるように振る舞い続け，日雇労働者からのアクセスを待つ。その過程で出会うことのできた一人の元日雇労働者（オオノ）とあくまで「よそ者」として相互作用に関わることで，周囲には伏せているという生活場所を教えてもらい，その場所で彼に対して１年近くにわたって継続的なインタビューを行うことになる。

都市の路上に留まることは，自らの身体を社会の抑圧的なまなざしに丸ごと晒すことを意味するが，彼はそのまなざしが押し付けてくるイメージから一定の距離をとり，目的に適った行動をとって生きる自己の姿を積極的に語った。そのうちに筆者と彼は互いに名前などの個人的な情報を明かし合い，彼はライフヒストリーの中で「保証人が何もない」ことで辿らざるを得なかった職業経歴を振り返ることで，自らのマージナリティに再び根拠を与える。それだけでなく，「天涯孤独というリアリティ」を仲間のヤマダとも共有し合うことによって，生き方を支えるためのパースペクティブを維持するのである。しかし，ストリートライフにも常に限界が付きまとう。彼は移動した先で重症を負い，入院したが後遺症が残る。２年半ぶりに遭った筆者は，野宿生活でも生きていくことが困難になったオオノに対して居宅生活への移行のために積極的に関与することを選ぶ。何とか無事に釜ヶ崎での居宅生活に移行することができたが，今度，彼はそこでの人間関係に苦しまねばならなくなる。居宅での生活は，ストリートライフで直面してきた「孤独」とは異なる性質の苦しみを彼に突きつけることにもなったのである。

以上の事例を通じて，大きく２点について述べておきたい。第１に，オオノとヤマダとの関係において見られたように，「野宿者」の存在が社会的に問題化される現状にあって，にもかかわらずストリートにいる彼らはというと，極めて醒めた態度にあるということである。それどころか，自分たちに対する社会の偏見や抑圧的なまなざしには変わりようがないことを充分に心得ており，むしろ互いのリアリティを共有し合うことによって，彼らに独自のハビット（習慣）や特有の社会的世界を保持しているということである。そうした世界を維持し，支えるための言説的な空間として，釜ヶ崎という寄せ場地域も彼らにとって重要な位置を占めていることについては言うまでもない。

そして第２に，私たちが考える「野宿者問題」の解決が，彼らにとっての問題解決にそのまま繋がるわけでは決してないということである。彼らにとってストリートライフにも限界があることはよく理解されている。したがって，そこで彼らが私たちに何らかの援助を必要とする場

合も当然ありうる。本稿の場合がまさにそうであったが，しかし，私たちの価値観や準拠枠に立った自立支援や援助の手は，彼らの急場を救うものであるかに見えても，長期においては再び新たな問題や課題を生む。だからといって援助の必要はないと言いたいのではない。そうではなく，オオノが「とにかく（周囲に）合わせて我慢するしかない」と語るとき，私たちはデュルケイムの言う「あるひとつの圧力がすすんで承認され, 受け容れられているからといって, それが圧力であることをやめるわけではない」（Durkheim 1895=1997: 210）という視点を常に思い返す必要があるということである。

3-2　臨床場面の危うさ
―参与観察から関与観察へ―

１章でも述べたように，路上で生きる人々の現実を，私たちは代弁し表象することができるのだろうか。おそらくそこでの成果を他者に問うた時点で，記述主体である私たちの意図もまた同時に問われざるを得ないだろう。その意味で，１つの社会的世界を表象する行為は，それを記述しようとする者の存在や意図と切り離してはもはや成り立たない作業だといえる。社会的な構成過程に入ったといわれる「野宿者問題」においても，路上で生きる人々の主観的現実や準拠枠をその問題化の構成過程に投げ入れようとするならば，その記述は調査者の意図とそれに対する被調査者の反応との相互作用そのものとして表現されることになるはずである。本稿では，こうした観点から調査者としての筆者のアプローチやそこでの戦略を明示し，その文脈で語られた被調査者のリアリティやライフヒストリーについて分析を加えるという方法を採ってきた。これによって一般化された「野宿者像」は語りえないとしても，特定の視点からの問題構成が先行しがちな「野宿者問題」を考えるとき[20]，常に立ち返って検討すべき貴重な臨床事例を提供してくれるのではないかと考えたからである。

ただし，そこでの臨床事例に少なからぬ妥当性を付与することが可能なのは，寄せ場の臨床場面が孕む困難性を自覚的に引き受けた限りでのことである。それは何か。野本三吉は，70年代の寄せ場での臨床体験の１つとして「日雇労働者と協同しオルタナティブな解決策を模索してきた」という自らの実践をあげていることについては述べたが，とりわけ90年代以降においては日雇労働市場としての寄せ場は縮小している。それによって，高齢化したかつての日雇労働者の多くは寄せ場から都市に拡散し，孤立した状態で野宿生活を送っているのが現状である[21]。その意味では，調査者がフィールドへ介入したとしても，日雇労働者との協同作業どころか，生きることそのものが困難に至った際の野宿生活の場面に出遭うことの方が現実には多いのではないだろうか。本稿ではそうした現状とも重なって, オオノとの調査関係をめぐり, データを収集するだけの傍観者的な参与者から，居宅移行へのサポートに付き添う積極的な関与者へと役割の変更を余儀なくされた筆者自身の姿も描かれざるを得なかったのである。

そして臨床場面の困難さもこの点に関連することになる。つまり，こうした寄せ場機能の縮小と日雇労働者の高齢化を背景とした継続的な調査の過程においては，調査者が参与観察のみならず，しばしば被調査者の生活に関与せざるを得ない場面が生じうるということである。それは調査上の社会関係において規定される権力関係が尖鋭化して現れる場面でもある。オオノ

の場合がそうであったように，筆者が付き添いとして付いていた状況で彼はほとんど言葉を発することができないほどに衰弱した状態であった。その間，筆者は自らの行動や判断に葛藤を感じながらも，居宅移行までの援助行為を途中でやめるわけにはいかないということも感じざるを得なかったのである。

では，そこでのジレンマを引き受けるために調査者の側にできることは何だろうか。おそらくその１つは，被調査者に向けて関与した自らのプロセスを調査者自身がもう１人の目で詳細に観察し，記述することにあるのではないかと考える。ここでは，この作業を「関与観察」と呼びたい。本稿ではすでに，この関与観察を通じて援助行為の結果については記述したが，援助行為のプロセスそのものについては紙面の都合もあり省略せざるを得なかった。いずれにしても，この作業を充分に踏まえた上で，初めて臨床場面の事例に関してその妥当性を判断することが可能になるのだということを強調しておきたい。

３-３　「ホームレス」とは誰か
―日常性をめぐる問い―

ここで，寄せ場に照準した臨床社会学は何を問うことができるのか，という冒頭の問いかけに戻ろう。繰り返すまでもなく「野宿者問題」もまた客観的に存在するものではなく，社会的に構成されるものであるとするなら，「野宿者を中心に据えた問題構成」という回答はあまりにも素朴に過ぎるであろう。先ほども述べたように，特定の視点からの問題構成が先行する中で，寄せ場の臨床社会学は，調査主体がアプローチしてきた臨床事例のいくつかをそこでの検討材料としてささやかながら提供できるに過ぎない。しかも，これまでのところ臨床事例のいくつかが示しているのは，彼ら自身の言葉による新たな「問題」定義や「解決策」の提示といった問題構成に魅力的な主張ではなく，あくまでも路上の視点に立った，社会に対する寡黙で醒めた態度である。病理の対象であろうと，救済の対象であろうと，彼らを問題視する私たちのまなざしは，彼らにとっては抑圧的なまなざし以外の何ものでもない場合がある。ましてや社会から提示される「解決策」や福祉的援助など，自らの都合に応じて利用するものではあれ，決して「世話にはなりたくない」対象として語られる。つまり，「ある社会システムにとって『問題』であるものは，他の社会システムにとってはごく当たり前のことであり，そして当然その逆の事態も成立する」（Berger 1963=2000: 58）というわけである。

では，寄せ場の臨床社会学を通して問われるものは何か。それは「野宿者を中心に据えた問題構成」と述べた筆者自身の誤謬にも通じるが，１つ１つの臨床事例を観察し記述することで明らかになるのは，彼／彼女らに何らかの存在論的なカテゴリーを一元的に付与することが，極めて困難であるということである。そのカテゴリーの１つは「野宿者」であるが，彼／彼女らの生活形態が野宿であることに異論はないにしろ，オオノやヤマダに見られるように，そのカテゴリーをもって彼らの日常的実践のすべてを包括することは，あまりにも無理があると言わざるを得ない。では，なぜ彼／彼女らは「野宿者」と呼ばれるのか。青木秀男は，「野宿者」の定義をめぐって以下のように述べている。

> すなわち人間まるごとの存在である野宿者をどのように定義づけようとも，そこにはかならず実

態にそぐわない側面が出てくる。結局一番肝要なことは，野宿を強いられている問題の核心をどう考えるかということにある。本書（『現代日本の都市下層』―筆者補足）では，野宿者の語を用いているが，そこには，まずは野宿という現前の事実を指し示すだけという最小限の定義をもって，むしろ野宿の背景と中身の多様性をできるだけ豊かに取り出す道を確保しておきたいという意図があった。（青木 2000: 104）

さらに青木は別のところで，「本質論でいえば，野宿者は，資本主義経済体制の産物であり，都市の産業構造と労働市場の産物」（同上: 88）であると述べ，その階層的な形成過程と就労構造に焦点をあてて野宿者概念を検討しているのである。つまり，青木の問題関心は，彼／彼女らが路上での生活を余儀なくされる構造的なメカニズムを明らかにすることにあり，この場合「野宿者」とは，そのための戦略的な分析概念であるということである。これが青木の議論に即した場合に「野宿者」というカテゴリーを使用する際の根拠であるが，では，社会的により広く使用されていると思われる「ホームレス」はどうであろうか。

このカテゴリーが，「マスメディアによる『浮浪者』のスマートな言替えに過ぎない」（西澤 1997: 79）ことはおそらく正しい。だがここでは，より根源的なところから「ホームレス」という言葉が使われるそれ自体の根拠が問われなければならない。オオノとヤマダは，ともに「天涯孤独というリアリティ」を保持しながら，事実，互いに援助し合うこともできない状態で，個々に孤独なストリートライフを生きていた。だが，それは「ホームがない」ことで，人間として本質的な何かを欠いた状態にあったと一方的に私たちが判断できるものであっただろうか。そもそも「ホーム」とは何だろうか。この言葉を通じて私たちが胸の中で強く喚起しているものとは何か。そして，そこでイメージされる「何か」をもたない「ホーム-レス」とはいったい誰を指しているのか。すなわち，ここでは彼／彼女らを「ホームレス」と呼ばなければならない，私たち自身の根拠が問われざるを得ないのである。こうして寄せ場に照準した臨床社会学は，臨床事例に即した固有のパースペクティブから，私たちが言説を発する自明の日常それ自体に疑いのまなざしを指し向けることになる。こう言ったからといって，再び一方的に私たちの社会に向けて批判の矢を突き立てるということではない。そうではなく，あくまで臨床事例が語るものに耳を傾けながら，「問題」の構成過程において様々な価値がぶつかり合う社会的ゲームの場から，一歩距離をおいた所に足場を築く。その上で，常に私たちの社会観や援助観を問い直しつつ，同時に臨床事例に関わり続ける作業が，寄せ場の臨床社会学には必要とされているのである。

おわりに

本稿では，寄せ場の臨床社会学は何を引き受け，何を問うのかという課題にもとづき，「釜ヶ崎」をフィールドとして，調査者としての筆者と被調査者との関わりを臨床場面に即して具体的に検討してきた。以上の考察を通して言えることは，臨床事例との関わりを経由して常に私たちが生きる日常それ自体を問い続けながら，その視点で再び臨床事例との関わりを積み上げていくという役割の同時性である。しかし，このことは単に役割の二面性を強調するものではない。むしろ，研究対象である人々の日常と調査する筆者自身の日常が，相互にその一部を

なしていると認識せざるを得ないという筆者の思いが反映している。

野本は，自らの日常における体験を問い直し記録することを「臨床作業」と名づけ，「この方向をより一層推し進めてゆくとすれば，日雇労働者の雇用，労働問題，失業，健康，そして住宅問題はどうあったらよいのかという課題に向けての『臨床体験』の交流，さらに具体的な政策への展望が，その中から生まれ，各地で実践化されてゆく方向が目指されてゆくと思う」（野本 1995: 65）と述べている。もちろん，筆者はここで安易な実践論を語るつもりはない。ただ，明らかなのは「問題」の社会的な構成過程において，60年代のスラム対策的な観点ととりわけ90年代以降の弱者救済の観点が，互いに混ざり合い拮抗し合う社会状況の中，私たちが野宿者と呼ばれる人々に貢献できることはささやかなことに過ぎないということである。例えば現在，オオノだけでなくヤマダ（現在73歳）も同様に，釜ヶ崎の地域内にあるアパートで居宅生活を送っている。彼もまた新たな生活形態のもとで，自らの日常を構築せざるを得ない状況の中を生きている。そこにおいて言葉を取り戻し，自らの生活を形づくるのは彼ら自身の作業である。その意味ではもちろん，コミュニティ・アプローチの視点を通じて彼らが生きる場[22]を確保することは，私たちに課せられた重要な課題であることは明らかである。だが，そのことは同時に，私たち自身が社会の中で彼らとどう関わっていくのかという課題を問い返している。

注

1） 寄せ場において「臨床」という視点から考察した先行研究者は野本三吉である。そこではまず，「社会臨床」という言葉が使用されている。野本によると，これは広く他者との「生活史」の交流という意味も含まれている（野本 1995）。

2） ただし，急いで付け加えておかなければならないのは，島の言及は研究者を直接批判したものではない。「『なぜ彼らは野宿せざるを得ない状況に追い込まれたのか』という問いや『そもそもなぜ野宿者の存在が問題なのか』といった問題解決の前提となるはずの問いが，私たち市民や行政当局者によって問われ，議論されてきたとは思えない」という批判意識をここでは基点としている。筆者が述べている「野宿者を中心に据えた問題構成は，いまだ空白のままである」という言及は，端的には島の言う「野宿者の声」「主体としての発言」の空白ということを意味している。

3） 他者の文化を表象するという点で，この問題に切実に関わっているのはおそらく文化人類学である。構築主義との関連では，中谷文美（2001）の論考から多くのことを教えられた。人類学がこれまで異文化に向けてきた特権的なまなざしと民族誌的な記述を通じて行ってきた文化の本質化・実体化に異議がつきつけられているのである。それはサイードによる「オリエンタリズム」批判の展開とも重なって，調査者と被調査者関係の非対称性の問題にまで及んでいる。だが，このことは一方で被抑圧者自身によるアイデンティティ表出としての本質主義的文化表象にどう向き合うかという課題を我々に突きつけてもいる。本稿における寄せ場の臨床社会学は，記述主体の超越的な視点から寄せ場・釜ケ崎を固定化して捉えるのではなく，筆者の行為そのものを記述の対象とすることで，被調査者との具体的な相互作用から釜ケ崎の現状を浮かび上がらせる試みである。

4） この考え方については，中村雄二郎（1992）の「臨床の知」「フィールドワークの知」の議論が参考になる。ここでは近代的な＜科学の知＞と対比して，「個々の場面や場所を重視して深層の現実にかかわり，世界や他者がわれわれに示す隠された意味を相互行為のうちに読み取り，捉える働きをする」（1992 :135）ものとして「臨床の知」「フィールドワークの知」が位置づけら

れている。この議論に対して井上芳保は，「彼の『臨床の知』は人々の生活世界の深層に立ち入っていくのに耐えるだけの力を本当に備えているであろうか」（1995 :129）と述べ，「ルサンチマン論」の視点から一定の批判を行っている。

5）　本稿での質的調査に関する方法論は，主にブルーマーの言う自然主義的探求法に依拠している。彼は，経験的世界における「探査」と「精査」という２つのアプローチを調査者の役割として課している（宝月誠 1999）。

6）　例えばそれは，構造的な不況が寄せ場を襲ったときに一挙に重大な問題として表面化したという。失業に対する社会的保障のない産業予備軍としての日雇労働者と毎月給料を至急され生活を守られている地方公務員との明らかなギャップ，そして日雇労働者による怒りの感情表出。野本は「こうした厳しい現実の中で，寿町で生活する人々と，相談員として働く公務員の姿が，ハッキリと見えてきてしまうのである」として「当然のことであるが，不況下の中で，ぼくらは，日雇労働者からの批判をあびることになった」と述べている（野本 1995: 59）。

7）　アメリカにおける Clinical Sociology の場合はより問題解決志向が強い傾向にある。Bruhn らは以下のように述べている。「臨床社会学という言葉は，社会学の視座，理論，方法に基づいて積極的に介入することを意味している。臨床社会学者の活動の場は多様であるが，変動主体としての積極的な介入は，他の実践的な社会学者と比べても特徴的な部分である」（Bruhn and Rebach 1996: 2）と。

8）　その中でも炊き出し作業の中核を担うのは，釜ヶ崎の労働者組合である（日雇労働者の労働と生活を勝ち取る会）。決まった顔ぶれの多くはそこの構成員であり（ただしそのメンバーも日頃は日雇労働者として働いている），炊き出しで使用する大釜や食器などもそのために組合が所有しているものである。「ボランティアとして参加する日雇労働者」というのは，ここではそれ以外の人たちのことを指しており，釜ヶ崎ならびにその周辺の住人であることは間違いないが，炊き出しの手伝いとしての参加は常に流動的であった。手伝いに来ていた同じ人物が，ある時は炊き出しの配食を待つ行列の側に並んでいるのを見かけることもあった。筆者が参加していた98年の２月から12月の時点で，中核となる構成員のメンバーは日によって５人から10人，それを手伝う流動的な参加者も５人から10人であったと記憶する。年齢はまちまちであったが，幅としては40代から60代に渡っていたと思われる。ちなみに，そこで調理される野菜は，組合のメンバーが近くの傷物市から調達してきたものであり，米については釜ヶ崎地域内で活動を行っているキリスト協友会の一つ「ふるさとの家」に向けて，全国から寄付として届けられたものであるという（当時の構成員メンバーからの聞き取りによる。98年４月）。

9）　ゴフマンは「ある集まりで，ある人が守ったり破ったりする規則を，同じ人が別の集まりでは同じように守ったり破ったりはしないということ，そして当然のことであるが，ある地域社会で支持されている関与規則も，別の地域社会では尊重されていないということなどがわかる」（1963b=1996: 259）と述べている。その意味では，筆者が自らの生活世界では慣わしとなっている行為や振る舞い（自己紹介や積極的な会話のやりとり）を，釜ヶ崎という地域やそこでの炊き出しという場にそのまま持ち込んでしまったことは，彼らにとって明確なルール違反であったと言える。反応としての「沈黙」や「見当違いの返答」は，ゴフマンの言をもじれば「規則を破る人が投げかける疑念に対する何らかの自衛手段」（1963b=1996: 251）であると解釈できるだろう。

10）　ただし，こうした匿名性を重んじたコミュニケーション上の技法が，それこそスティグマを課せられた人々が生きる上で，常に包摂的に作用していると見るのは早計である。炊き出しの準備中のやりとりで「時に喧嘩になり，途中で顔を出さなくなる者もあった」と述べたが，ここでのコミュニケーション過程に些細な理由であろうと何らかの形で失敗してしまった人は，再び炊き出しの手伝いの場に戻ってくることは難しい。参加者は常に流動的であると述べたが，

一定して参加している人は釜ヶ崎でのコミュニケーション能力を成功裏の内に身につけることができた人だと言える。その意味では，匿名性を重んじた関与コードは，釜ヶ崎において適切な振る舞いができる者とそうでない者とを振り分ける新たな区分線の役割をも果たす。

11） さらに，『タクシー・ダンス・ホール』の著者Ｐ・Ｇ・クレッシーは，こうしたジンメルの議論を受けて質的調査法における「よそ者論」を展開している。彼は，「調査者と被調査者との間の親密さが価値あるデータや知見に貢献することは認めるが，こうしたデータのみを使用するには明らかに困難がある」（Cressey 1983: 102）とした上で，調査者が被調査者に対してよそ者（stranger）として振る舞いながらデータを収集する際の２つのタイプを整理している。１つは，社会学的ストレンジャー（sociological stranger）であり，２つ目は，匿名的ストレンジャー（anonymous stranger）である。前者は，弁護士，医者，ソーシャルワーカーといった被調査者よりも高い地位にある人々（stranger with prestige）や，あるいは逆に低い地位にある人種カテゴリーを背負った人々，集団に属する人々（stranger with prejudice）のことを指す。後者は，クレッシーの例をとるとダンスホールで互いの経歴を隠したまま，つかの間の出会いの中で一時的な会話を交わすといった場合を指す。彼は双方の調査者のスタンスを比較考察し，収集されるデータの性質の違いについて検討した上で，匿名的ストレンジャーという調査者のスタンスにおいては，対象集団の思考や行動，志向性などに関して並外れたデータを収集することが可能であると指摘している。

12） 彼の寝場所へ案内されて約１週間経過した頃から，テープレコーダーを使用してインタビューを開始している。その際，オオノに調査の意図を話し，テープレコーダーを使用してもいいかどうかを尋ねた。引用に際しては，訂正や修正を加えることなく，テープ起こしした内容をそのまま記載しているが，一部省略箇所を含む。それは（…）で示している。引用中の（　）は筆者の補足であり，インタビュー事例の後の（　）にはインタビューの日時を記載している（以下同様）。カッコ内に記したように，この事例は98年6月22日に聞き取ったものである。すでにインタビューを開始して２ヶ月以上が経過した状況で話された内容である。この時点では，仲間どうしの繋がりの関係やおごり合いの流儀，そこでの束縛などに話題が及んでおり，「人が多くて束縛の多い釜ヶ崎ではアオカン（野宿）はしないことにしている」という彼の言葉に対して，筆者が疑問をもって質問を返した部分を，ここでは切り取っている。

13） ゴフマンは「知り合いでない者どうし」の関わりについて，「個人を対面的なかかわりに露出させるもうひとつの一般的状況が考えられる」とした上で，それは「個人が役割を離れている場合である」と述べている。「他人との接触を強要することによって個人の利害を害してはならないという前提と，個人の利益は本来の役割を厳粛にはたす時に強調されるという事実から考えて，本来の役割を遂行していない時にその人とコミュニケートするならば，それほど気を使わなくてもすむはずである」という（Goffman 1963a=1996: 134）。この点は，おそらくコミュニケートしようとする双方の側において言えることである。

14） Ｐ・Ｌ・バーガーは，ゴフマンの提起した「役割距離（role distance）」の概念を「ある役割を皮肉たっぷりに演じること，つまり，演じている本人はまったくその気がなく背後に思惑を秘めているという事態」として捉え，「厳しい強制の下におかれた状況ではこの現象がいつもうみだされるだろう」と述べている（Berger 1963=2000: 197）。ここでの男性のナラティブは，「世間」からのまなざしによる「状況定義」に対して，彼自身がそうした拘束からの内的距離を図りつつ，「再定義」を試みる可能性を含んだ内容として引用したものであるが，バーガーの使用する「役割距離」の概念も，統制対象とされた人々によるシステムの操作，あるいはシステムの利用という文脈で言及されている点が重要である。

15） 「暖簾分け」ということに関して彼は以下の

ように語っている。「そうそう，拡張（員）とか洗濯屋とかパン屋とかね，何か技術覚えようと思ってね。だけど洗濯屋にしたってパン屋にしたって，技術覚えようたって，自分では金ないんだから。それだけの設備なんかできるわけないよ。（…）おいらみたいに，親兄弟は無いわ，金が無いわね，そんなのが店構えてできるわけない。それだったら諦めた方がね。結局そうなってしまうんだね。それからはずっともう，これ。旅から旅へね。」（1998．5．1）

16）「それが今はこうなってるわけね。今はもうアンコ（＝日雇労働者）どころか，まだ一つ下のフーテン（＝野宿生活）やってるわ。まあ，アンコもフーテンも変わらんけどね。そりゃあ，みんなそうなんだから。仕事があったら行くし，なかったらみんなフーテンするしかないんだから。誰でもそうだ，みんなそうだよ。好き好んでフーテンやってるわけじゃないでしょ。」（オオノ．1998．5．7）ここには，資本に従属する日雇労働者についての本質的な存在規定が語られている。彼が長期の野宿を余儀なくされ，釜ヶ崎から離れて現在の場所で生活するようになるのは94年からのことである。

17）オオノに対して筆者が発した「ヤマダさんが突然，襲われたりして居なくなったら，もはや何処にいるのか分からないし，連絡も取りようがないですね」という質問に対して，オオノは「ハハハハ，そりゃそうだよ。いつ何処で倒れるか分からんのだからね。そんなの金魚の糞じゃないんだから。（…）それはもう，別においら（やヤマダさん）だけでなく，西成（＝釜ヶ崎）におる人間はみんなそうだよ。もう天涯孤独だからね。それが宿命だから。」（1998．6．22）と答えている。

18）だが，時間が経過して行けば行くほど，オオノをめぐるヤマダの語り方は変容を遂げていく。例えば半年以上が経過し彼が帰って来ないではないかという憶測が高まると，ヤマダの語りの中で「オオノの不在」は，これまで相互のやりとりの中で共有してきた「天涯孤独というリアリティ」を再び維持するための手段として使われる傾向にあった。「もう本人（＝オオノ）なんかも言ってるもん。もうわしらは，気まぐれで悪いことなんかしてないんやから，会った時に「おーい！」て声掛け合ったらそれでええんやって。そういうのが（わしらの）生活やって，話し合っておったからね。それはもう，気を使うのもほどほどにな。なんぼ気を使っても，してやれんことはやれんのだから」（1999．11．24）。

19）これは，西成労働福祉センター労働組合と釜ヶ崎の地域内で営業する一部の簡易宿泊所の営業者による発案で生まれたものである。同労働組合による『野宿をなくして，「人間居住」を実現するための緊急策と抜本策』（1998）の理念に基づいている（釜ヶ崎のまち再生フォーラム：2002）。

20）ここでは，しばしば多数派の価値判断を前提とした社会病理学的アプローチを念頭においている。

21）島和博（1999）を参照。さらに島は，「1995年野宿者聞き取り調査」から大阪市内の「野宿生活者」の類型化を試みている。その中で，野宿生活における「①初回・短期」型→「②複数回・短期」型→「③複数回・長期」型という遷移の流れが釜ヶ崎の日雇労働者が野宿に至る際の1つのパターンであるとしている（1999 :155）。この島の類型に従うなら，本稿におけるオオノとヤマダはそこでの典型的な事例を構成している。

22）ここで言う「生きる場の確保」とは，釜ケ崎などの寄せ場地域を指すのか，テントの密集した公園を指すのか，あるいはストリートなのか，もしくは何がしかの社会的な施設を意味するのか。本稿では，ここにおいて設定した課題の性質上，その概念についての詳細な議論に立ち入ることは差し控えたい。しかし，筆者がここで意識せざるを得ないのは，先行する岩田正美（2000）の議論である。岩田は，福祉国家の制度のあり様とそこから排除されあるいは離脱してゆく「ホームレス」との関係を考察している。その上で，「労働＝雇用という枠組みの変更」「既存の住宅や地域住民という枠組の変更」など，「われわれの社会」の既存の装置を変更することで「生きていく場所」を回復する政策的な方法

について提案している。臨床社会学的なアプローチによって政策的な展望を示すことは別稿の課題である。いずれにしても本稿の試みが貧困研究に連なる社会政策に付け加えたいのは「生きる場からの発想」である。

文献

青木秀男，2000,『現代日本の都市下層　寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店。

Berger, P.L.,1963, *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective,* New York, Doubleday & Company.（＝1995，水野節夫・村山研一訳『社会学への招待』新思索社。）

Bruhn・John and Rebach・Howard., 1996, *Clinical Sociology: An Agenda for Action,* Pleum Press, New York and London.

Cressey, P.G., 1983, “A Comparison of the Roles of the ‘ Sociological Stranger’and the ‘Anonymous Stranger’ in Field Research,” *Urban Life,* 12(1): 102-120.

Durkheim, E.,1895, *Les règles de la méthode sociologique,* Paris: P.U.F.（＝1997，宮島喬訳『社会学的方法の基準』岩波書店。）

Goffman, E., 1959, *The Presentation of Self in Everyday Life,* Doubleday & Company, Inc.（＝1993，石黒毅訳『行為と演技』誠信書房。）

————, 1963a, *Behavior in Public Places: Notes on the Social organization of Gatherings,* The Free Press of Glencoe.（＝1996，丸木恵祐・本名信行訳『集まりの構造』誠信書房。）

————, 1963b, *Stigma: Notes on the Management of Spoiled Identity,* Pretentice-Hall, Lnc.（＝1993，石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房。）

宝月誠，1999,「『自然主義的探求法』の再検討」奈良女子大学社会学研究会編『社会学論集』第６号，177-188頁。

井上芳保，1995,「情報資本主義のなかの臨床の知－心と身体の商品化をめぐって」『人間・臨床・社会－社会臨床シリーズ４』日本社会臨床学会編，影書房，93-131頁。

岩田正美，2000,『ホームレス／現代社会／福祉国家「生きていく場所」をめぐって』明石書店。

釜ヶ崎再生フォーラム，2002,『もう一つのシニアハウス－釜ヶ崎におけるサポーティブハウスの挑戦』（居住者事例集刊行記念・サポーティブハウス事業に関する中間発表フォーラムパンフレット）

狩谷あゆみ，2001,「カテゴリー化の暴力性――神戸市の野宿者問題をめぐって」『解放社会学研究』第15号，75-97頁。

見田宗介，1988,「まなざしの地獄――現代社会の実存構造」『現代社会の社会意識』1-57頁。

中村雄二郎，1992,『臨床の知とは何か』岩波新書。

中根光敏，1996,「“第一次暴動”を基軸とした釜ヶ崎をめぐる社会問題の構成――行政対策を中心として――」『解放社会学』第10号，163-184頁。

————，1997,『社会学者は２度ベルを鳴らす』松籟社。

————，2001,「寄せ場／野宿者を記述すること」『解放社会学』第15号，3-25頁。

中谷文美，2001,「＜文化＞？＜女＞？ ── 民族誌をめぐる本質主義と構築主義」『構築主義とは何か』上野千鶴子編，勁草書房，109-137頁。

西田心平，2001,「『野宿者問題』の対象把握 ── 『寄せ場』をめぐる先行研究からの検討」『立命館産業社会論集』第36巻第４号，123-142頁。

————，2001,「寄せ場のストリートライフ－釜ヶ崎における単身労働者の生活世界－」『立命館産業社会論集』第37巻第2号，115-141頁。

西澤晃彦，1997,「都市下層としての野宿者――『ホームレス問題』とその構造的背景についてのノート」『現代日本社会に於ける都市下層社会に関する社会学的研究』文部省科学研究費報告書，79－90頁。

————，2000,「『豊かな社会』と周辺層」『日本の階層システム１　近代化と社会階層』原純輔編，東京大学出版会，197-216頁。

野本三吉，1995,「社会臨床論序説――生活における臨床とは何か」『人間・臨床・社会－社会臨床シリーズ４』日本社会臨床学会編，影書房，45-92頁。

————，2001,『生きる場からの発想　民衆史への回路』社会評論社。

大牟羅良，1958,『ものいわぬ農民』岩波新書。

島和　博，1999,『現代日本の野宿生活者』学文社。

————，2001，「Ⅷ 不快の現実と向き合う」『落層野宿に生きる』森田洋司編，日本経済新聞社，170-183頁。

Simmel, G., 1908, *Soziologie*, Duncker & Humbolt.（＝1994，居安正訳『社会学（下）』白水社。）

鷲田清一，2000，『「聴く」ことの力－臨床哲学試論』TBSブリタニカ。

山田富秋，2000，「フィールドワークのポリティックス」『フィールドワークの経験』好井裕明・桜井厚編，せりか書房，64-80頁。

A Clinical Sociology of Yoseba : concerning the construction of the “homeless problem”

NISHIDA Shinpei＊

Abstract: The purpose of this paper is to manifest an assignment of Clinical Sociology focused on Yoseba, and to examine what it signifies in the field of research. The author examines a process of change in relation between the author as researcher and the object of research. Social problems are socially constructed. On the basis of this construction, there are two approaches to studies of Yoseba, that is one standpoint of constructing discrimination problems and another standpoint of deconstructing of problem construction by power. Then can a researcher represent the voice of the person concerned in a homeless problem? The author deliberates what clinical cases can tell us. It is a proper reality of marginal man, and their interaction in everyday life. But, an adequacy of the details is tested on the basis of a researcher undertaking a relation of power in research. By examination of these aspects, the author shows that one role of Clinical Sociology is to entertain radical doubts about our everyday life, and to be involved in clinical cases.

Keywords: Yoseba, clinical sociology, constructionism, involvement code, stranger, marginal man, unintended consequences

＊Graduate Student, Graduate School of Sociology, Ritsumeikan University